東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2005年9月23日

イスラームにおける同胞愛

偉大なるアッラーは、クルアーンで、ムスリムたちを兄弟であるとされておられます。クルアーンの章句において、その意味が説かれている点もまた、注意をひくものです。クルアーンは次のように言っているのです。

信者たちはひとえに、兄弟です。彼らの間で他の結びつきはありえないのです。すなわち、例えば友人といった関係ではないのです。なぜなら、自分が困難に陥った際、友人は互いを裏切るかも知れず、あるいは救いの手を伸べないかもしれません。

上司と部下、司令官と兵士といった関係でもありえません。なぜなら人である以上、この結びつきにも弱点があるからです。部下は上司に従わないかも知れず、また兵士も司令官を裏切るかもしれません。

親戚のような結びつきでもありません。親戚としての結びつきは、それが軽視されていくうちに弱まります。例えば、おじが何年も自分の姪に会っていなかったとしても、それほど苦痛にも感じなくなるのです。

兄弟となることは、一見すてきなことのようにも思えますが、本当は容易なものではありません。なぜなら兄弟愛、同胞愛においては、具体的なつながりよりも、精神的、感覚的結びつきが要されるからです。兄弟、同胞であることは、血統上の兄弟と同様、自己犠牲を必要とするからです。苦しみも、恵みも分け合わなければならないのです。

兄弟の犯した過ちを自分がかぶり、献身的に振舞うのが、真の兄弟ではないでしょうか。手にしているひとかけらのパンを分け合えるのが兄弟ではないでしょうか。兄弟は言い争いをし、喧嘩にもなります。しかし仲直りをした後は、その喧嘩を忘れるのが兄弟なのです。仲直りをすることすら、一つのすてきな出来事になります。それは涙によって飾られることもあるでしょう。

親愛なるムスリムの皆様。イスラームにおける同胞愛には、二つの側面があります。一つは、近いところにいる人たち、もう一つは普遍的規模です。職場で一緒に働いている人たち、近所に住んでいる人たち、あるいは何らかの理由で頻繁に会っている人たち、こういった近くにいる兄弟たちとの結びつきは、当然より強いものになります。しかし、一度も見たこともない、出会ったこともない、それでも私たちがその存在を知っている多くの兄弟たちがいます。今日、ムスリムとして私たちが忘れている、最も重要な点の一つがこれです。それらの兄弟たちのために、苦しみ

を分かち合うことができているでしょうか。あるいは、私たちが手にした恵みを、彼らに分け与えることができているでしょうか。彼らについて喜びを感じたり、悲しんだりしているでしょうか。彼らに救いの手を差し伸べているでしょうか。せめてドゥアーにおいてでも、彼らを思うことができているでしょうか。

預言者ムハンマドは、ムスリムたちを体の構成部分に例えられました。一つの器官が病むと、残りも影響を受けるのです。別のハディースでは、信者の悩みを気にかけない人を信者と見なさないとされています。だからこそ、殉教者たちは戦場で、一滴の水を求めながらも、その水を他の兄弟たちに譲ったのです。

ちょうどラマダーンも始まろうとしています。世界各地で、苦難のうちにある兄弟たちに思いを寄せましょう。彼らの苦痛を、私たち自身の苦しみとしましょう。彼らが救われるため、経済的、精神的な援助を行ないましょう。ドゥアーする時も、彼らのことを忘れないようにしましょう。

私たちが同胞愛をさらに強め、一体となることができるよう、アッラーが私たちに力を与えてくださいますように。